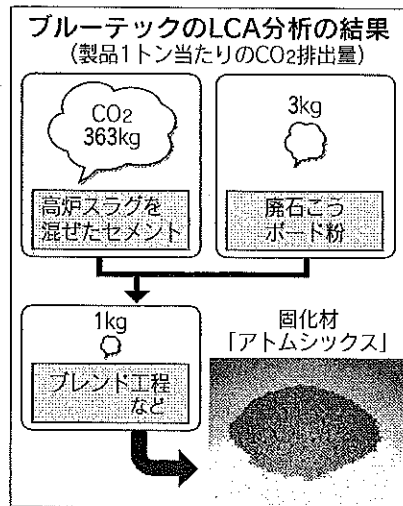


「CO₂ゼロ」の地盤固化材

ブルーテック 排出枠で相殺

地盤改良材を販売するブルーテック（堺市、小林清代表取締役）は八月に、二酸化炭素（CO₂）の排出負荷をゼロとみなせる地盤改良用固化材を発売する。原料段階から製造までの製品ライフサイクルで出るCO₂を排出枠で相殺する。製品一トあたりCO₂負荷を三百六十七キロ強と算出した。食品や日用品など消費財だけでなく、企業間で取引される部材にも環境配慮の商品が広がってきた。



アルゼンチンの風力発電から作った排出枠四百トと、インドのバイオマス（生物資源）発電から作った排出枠五十トを、排出枠販売のリサイクルワン（東京・渋谷）から購入する。購入額は一ト四千―五千円。

固化材の価格は一ト一万円前後で、このうち千五百円程度を排出枠の購入にあてる計算だ。主に環境負荷への意識が高い公共工事向けなどの利用を見込む。

販売する固化材「アトムシックス」は、建設工事の際に、地盤が水分を含んで軟弱なときに混ぜて使う。地盤を固めて建設工事をしやすいように改良するための利用を見込む。

排出枠を使うだけでなく、製造段階でCO₂排出を減らす工夫もした。LCA（ライフサイクルアセスメント）分析によると、製造段階で排出するCO₂は多くが、セメントの製造段階で出ることがわかった。セメントの中に高炉スラグを混ぜたり、環境負荷が低い廃石こうボードを粉砕した粉を二割ほど混ぜるなどで環境負荷を軽減したという。

この結果、ほとんどをセメントで作った製品に比べ、製造時に排出するCO₂は半分程度になっているという。

国や地方自治体発注の公共工事では、開発行為による生態系の破壊を防ぐため、ゼネコンなどに環境保全対策を講じるよう求めている。施工業者を通じ、建設資材にもこうした考え方が波及するのは必至で、環境対応をアピールし、製品の競争力を高める。